

遠方の語り部との交流（方法編）：本会場を場とした神戸（日本）とパル（インドネシア）の語り部の遠隔地講演

佐々木俊介^{1, 2}・河田慈人²

¹早稲田大学アジア太平洋研究センター

²人と防災未来センター

1. はじめに

被災経験や被災から得られる知識の伝達や継承において語り部による語りが果たす役割は大きく、例えば人と防災未来センターのような災害ミュージアムにおいて語り部の方々が活躍している（人と防災未来センター公式ウェブ・サイト）。各災害ミュージアムで行われている語り部による語りは、語り部の役割が自身の経験を語ることであり、その災害ミュージアムが立地している地域で発生した災害に関するものが中心となっている。このことは災害ミュージアムごとの特色という意味では強みであるが、分野の偏りという意味では弱点となる。防災教育という観点からは様々な種類の災害について満遍なく学ぶことも重要であり、語り部による語りの場の提供に関して、より良い形を模索する必要があるといえる。

近年、映像および通信における技術進歩によって遠隔地とのコミュニケーションが容易になり、語り部の活躍の場を広げることが可能な環境が整いつつある。日常生活において実感するようにスマート・フォンのカメラ機能は極めて向上し、LINE©のようなビデオ電話を容易に行うことが可能なアプリケーションも広く普及してきている。通信環境についても、先進国はもちろん途上国においてもかなり整備されてきている（ITU, 2018）。このため、スマート・フォンによるビデオ電話を活用することにより、比較的低コストで、語り部が自身の居住域の災害ミュージアムのみならず、遠方にある災害ミュージアムにおいても活躍することができる環境が整いつつあると言える。

そこで本発表においては、本大会の会場（高松市）を講演会場として、人と防災未来センターの語り部（神戸市）およびパルの避難所の滞在者（インドネシア共和国）による講演会の開催を試みる。本発表は口頭発表（方法編）とポスター発表（実演編）からなる。口頭発表（方法編）では、交流方法の検討過程についての発表を行う。ポスター発表ではポスターに設置した機器を用いて、日本とインドネシアの語り部の方々に講演して頂くとともに、学会参加者との質疑応答を行って頂く。

2. 交流方法の検討過程と交流方法の概説

（1）全体の構成

本研究は試験的な取組であるため、講演の依頼は日本国内外それぞれの語り部の方に依頼し、オーディエンスは大会参加者が最も相応しいと考えた。日本国内での試験であるため日本の語り部の方々に依頼するとともに、日本国外の事例としてインドネシア（日本とは言語もインフラの整備状況も異なる）の語り部の方々に講演の依頼を行った。オーディエンスとしては、語り部の方々とのかし方や防災の専門家からのアドバイスを得られることを考慮し、災害情報学会の大会参加者が最も望ましいと考えた。

本研究では互いに遠く離れた場所に居る者同士の交流を実現するために、スマート・フォンとタブレット、メッセージング・アプリケーションを活用する。具体的には、図1に示したように、本大会の会場（高松市）と人と防災未来センター（神戸市）、本会場とパルの避難所（インドネシア共和国）のそれぞれを、ビデオ電話を用いてコミュニケーションが可能な状態にする。人と防災未来センターおよびパルの避難所では、スマート・フォンを用いてもらい、本会場ではSurface Go©を用いる（図1）。全体の構成に関する詳細は、本予稿集の「遠方の語り部との交流（実演編）：本会場を場とした神戸（日本）とパル（インドネシア）の語り部の遠隔地講演」に示した。

（2）人と防災未来センター（神戸市、日本）

a) 協力を依頼する語り部さん

人と防災未来センターにおいて語り部としてボランティア活動をされているの方々に依頼する。人と防災未来センターは阪神淡路大震災の経験や教訓の展示や体験学習を中心とした災害ミュージアムである。なお、人と防災未来センターでは阪神淡路大震災に限らず様々な災害の研究や成果発表を行っており、詳細については公式ウェブ・サイトを参照されたい。

b) 使用するアプリケーション

LINE©を用いる。日本国内においてはLINE©が最も一般的であり、世代を問わず普及しているため、操作方法

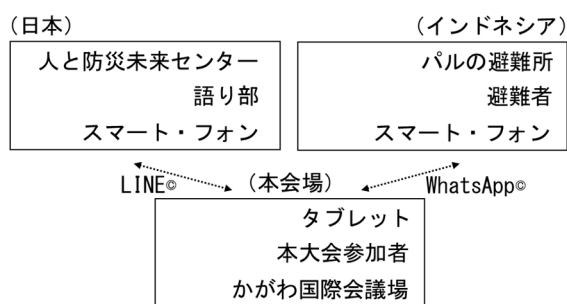


図 1 全体の構成の概要

の習得を考慮して LINE®をビデオ電話のアプリケーションとして採用する。

c) 言語の問題

言語については大きな問題が発生しないと考えている。大会参加者の多くは日本語話者であり、人と防災未来センターの語り部の方々も日本語話者であるため、言語上の問題はほとんど発生しないと考えている。加えて、日本国内は通信環境も安定しているため、聞き取れないほどに雑音が入ることや会話が途切れることはほとんど発生しないと考えられる。

(3) パルの避難所 (スラウェシ州、インドネシア)

a) 協力を依頼する語り部さん

パルの避難所に滞在されている住民の方々に依頼する。パルはスラウェシ島の中部に位置し、2018年9月にマグニチュード7.5の地震およびそれに伴い発生した津波に襲われ、4,340人の死者行方不明者を出す被害を受けた (BNPB, 2019)。パルでは未だ避難所に避難したままの住民が存在しており、困難な状況が続いている。

b) 使用するアプリケーション

WhatsApp®を用いる。インドネシアにおいては、WhatsApp®が最も一般的であり、操作方法の習得を考慮して WhatsApp®をビデオ電話のアプリケーションとして採用する。

c) 言語の問題

意志の疎通に関して、大きな問題が発生すると考えている。来場者のほとんどは日本語話者であるのに対して、パルの住民の言語は公用語であるインドネシア語か、地方言語であり、少なくとも公用語であるインドネシア語の通訳が必要となる (なお、本発表の筆頭者はインドネシア語の会話が可能である)。加えて、通信環境についても、かなり改善されているとはいえ、地方都市であり、通信が不安定である。このため、母語の違いに加えて、通信の不安定さという問題が発生する可能性がある。

3. おわりに

(1) 予想される課題

予想される課題のうち最も大きなものは、パルの避難所の方々とコミュニケーションである。海外の被災者との会話は体験としては貴重なものになると考えられ

るが、通訳の方法が大きな課題になると予想される。次に、人と防災未来センターおよびパルの事例で共通する課題として、本研究で行うのはビデオ電話を通じた遠隔地とのコミュニケーションであり、対面と通信では得られる感覚に大きな違いがあるため、ライブ感の無さという問題が発生する可能性がある。このほかにも、会場において様々なものが随時発生すると考えられ、その都度対応していく必要がある。

(2) 今後の取組

今後の研究において、以下の2点について取り組みたいと考えている。

a) 語り部さんのネットワーク化

国内外における、より多くの災害ミュージアムの語り部さんたちとのネットワークの構築を行いたいと考えている。日本国内の語り部さんはもちろん、海外の災害ミュージアムで活動される語り部さんとの積極的な交流をはかり、語り部さんのネットワークを構築するとともに、各地のミュージアムに語り部さんを紹介していきたいと考えている。

b) 語りのアーカイブと公開方法の検討

語り部さんたちの語りをアーカイブ化し、学習や研究のためにインターネットで公開する仕組みを構築したいと考えている。現状においても進められているアーカイブ化をより推進するとともに、公開する際に発生する問題 (著作権やプライバシーの保護など) を回避あるいは最小限化する方法について検討していきたい。

謝辞: 本発表は様々な方のご協力により実現することができており、関係者の皆様に感謝申し上げます。とりわけ、人と防災未来センターの語り部の方々、および、パルの避難所の方々からの多大なご協力を頂いていることに感謝申し上げます。加えて、研究結果の発表の場である大会において、調査と即興の結果発表を行うという通常とは異なる発表形態を認めてくださった災害情報学会、とりわけ第21回大会組織委員会の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- Badan Nasional Penanggulangan Bencana (BNPB), 2019, Gempa bumi dan Tsunami Sulawesi Tengah, Accessed: August 27, 2019. <https://bnpb.go.id/infografis-gempabumi-m74-tsunami-sulawesi-tengah>. (インドネシア語)
- International Telecommunications Union (ITU), 2018, ITU releases 2018 global and regional ICT estimates: For the first time, more than half of the world's population is using the Internet, Accessed: August 27, 2019. <https://www.itu.int/en/mediacentre/Pages/2018-PR40.aspx>.
- 人と防災未来センター公式ウェブ・サイト (参照年月日: 2019.08.27), <http://www.dri.ne.jp/>